
研究の経緯と成果・課題

東 潮

I はじめに

2005年から2007年に実施した共同研究『三国志』魏書東夷伝の国際環境の研究報告である。

『三国志』卷三十、魏書東夷伝（以下『三国志』東夷伝と略称）の「東夷」諸種族・諸国の高句麗・夫餘・沃沮・挹婁・濊・韓・倭、漢公孫氏魏晉の遼東・玄菟・楽浪・帯方郡の考古学・文献学的共同研究である。

これまで倭をはじめ、『三国志』東夷伝の諸国・諸種族にかんする研究は蓄積されてきている。そこで「東夷伝」全体を対象とした共同研究を企画した。近年のロシア沿海州、中国東北地方、朝鮮半島における調査の成果をふまえ、倭・倭人の歴史を東北アジア諸民族史のなかで位置づける。

日本列島の倭・倭人を東北アジア世界のなかで位置づけることに意義がある。各共同研究者のこれまでの研究成果をもとに、3世紀を中心とした東北アジア諸地域の考古学的・文献学的研究である。漢魏の楽浪郡・第一玄菟郡・帯方郡は北朝鮮に所在する。魏志東夷伝の地域は、中国・北朝鮮・韓国・日本にまたがり、現在の国境にとらわれない地域研究が不可欠である。本共同研究は、3世紀の倭の歴史をとりまく国際環境を明らかにすることにある。

国立歴史民俗博物館においては、魏志倭人伝に関連する特別展や共同研究がおこなわれた。

1996年『倭国乱る』、1999年『新弥生紀行－北の森から南の海へ』、1999年『よみがえる漢王朝－2000年の時をこえて－』、1999年5月～10月〈朝日カルチャセンター〈三国志がみた倭人たち〉（設楽博已編 2001『三国志がみた倭人たち－魏志倭人伝の考古学』山川出版社）、1997年～2001年文科学省科学研究費重点（特定）領域研究〈日本人および日本文化の起源に関する学際的研究研〉（考古学班研究代表者春成秀爾）、2004～2008年学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジア－炭素年代測定による高精度編年体系の構築」（研究代表者西本豊弘）、1997年佐原真『魏志倭人伝の考古学』（『歴博ブックレット』1）、2003年佐原真『魏志倭人伝の考古学』岩波書店などである。以上の歴博による魏志倭人伝、弥生文化研究をふまえ、その魏志東夷伝の共同研究を意図したのであった。

本研究プロジェクトは、5～6世紀を中心とした「古代東アジアにおける対外交流と文化変容の比較研究」（代表杉山晋作）と時空的な関係において、重層的・補完的な関係にある。古代東アジア諸国の対外関係、国際関係の研究にたいして、当研究テーマは3世紀を中心として、高句麗滅亡の7世紀末葉（668年）をふくめ研究対象としている。

人間文化研究機構連携研究「ユーラシアと日本 交流と表象」と有機的関係をもつ。歴史上における諸民族・諸国家の形成、交流、移動、移住、領域問題など、歴史上の「東夷」諸国、諸民族の

境域、今日の国家領域、国境問題などを研究対象とする。

Ⅱ 研究の組織と経過

【研究組織】(2005年当時 ◎研究代表者、○研究副代表者)

氏名	所属・専攻
◎東 潮	徳島大学総合科学部・教授・考古学
後藤 直	東京大学大学院人文社会系研究科・教授・考古学
川本 芳昭	九州大学大学院人文科学府・教授・東洋史学
武末 純一	福岡大学人文学部・教授・考古学
大貫 静夫	東京大学大学院人文社会系研究科・教授・考古学
田中 俊明	滋賀県立大学人間文化学部・教授・朝鮮古代史
徐 光輝	龍谷大学国際文化学部・教授・考古学
宮本 一夫	九州大学大学院人文科学府・教授・考古学
高久 健二	埼玉大学教養学部・助教授・考古学
鄭 仁盛	学術振興会・外国人研究員・考古学(現嶺南大学校人文大学教授)
設楽 博己	駒沢大学文学部・助教授
西本 豊弘	国立歴史民俗博物館研究部考古研究系・教授・考古学
広瀬 和雄	国立歴史民俗博物館研究部考古研究系・教授・考古学
仁藤 敦史	国立歴史民俗博物館研究部歴史研究系・助教授・日本古代史(現教授)
○藤尾 慎一郎	国立歴史民俗博物館研究部考古研究系・助教授・考古学(現教授)
上野 祥史	国立歴史民俗博物館研究部考古研究系・助手・考古学(現助教)
石川 岳彦	国立歴史民俗博物館・研究機関研究員・考古学

共同研究員の主要な研究分野は中国考古学、朝鮮韓国考古学、日本考古学、中国史、朝鮮史、日本史である。これらの専門分野の枠を越え、「東夷伝」を対象化することに本研究の意義がある。

Ⅲ 研究経緯

『三国志』魏書東夷伝をめぐる諸問題についての研究発表、『三国志』東夷伝の釈読・訳注をおこなう。同時に「東夷」の諸地域、中国、朝鮮韓国、日本の各地を踏査する。諸地域の考古資料と史料との関係を解明する。東北アジアの諸地域を3次にわたって調査した。国内では倭人伝の「一支国」(壹岐島)を調査した。

地域的には、黒龍江(アムール河)流域から松花江、牡丹江、渾河・遼河流域、臨津江から漢江流域、大興安嶺から遼東半島、朝鮮半島と踏査した。黒龍江流域、大興安嶺一帯の調査は鳥居龍藏、泉精一、梅棹忠夫、吉良龍夫、大塚和義らによって人類学、民族学、生態学的の調査がおこなわれている。東夷伝の周縁地域、東夷を鮮卑との接触地域を踏査した。また黒龍江省、吉林省、遼寧省、内蒙古自治区における調査・研究成果を把握することもできた。

各共同研究員はそれぞれの専門分野に応じて、東北アジア(モンゴル、中国、シベリヤ沿海州、朝鮮韓国、日本)の各地でフィールド調査をおこなってきた。当共同研究で、「東夷」という共通の地域、

未知の地域のフィードバックによって「東夷伝」の歴史環境を明らかにする。『三国志』卷三十の烏桓・鮮卑・東夷（夫餘・高句麗・東沃沮・挹婁・濊・韓・倭）の諸国は境界を接し、密接な関係にある。本研究ではそうした地域をふくめた東北アジア諸地域を対象として調査した。

『三国志』魏書東夷伝の諸国は今日の国家領域と異なることは自明のことである。したがってロシア・モンゴル・中国・朝鮮韓国・日本の各地の東北アジア世界の視点で「東夷伝」を位置づける。

平成 17 年度

第 1 回研究会 5 月 28・29 日 於 歴博

今後 3 ヶ年の計画や成果の公表のあり方を討議するとともに、当該研究に関連する東夷伝の諸国に関する諸問題を共同研究員 2 名がそれぞれ考古学と文献史学の観点から発表した。

東 潮 「東北アジア調査行－魏志東夷伝の世界を歩く－」

田中 俊明 「魏の東方経略－扶余伝訳注稿より－」

第 2 回研究会 9 月 26 日～28 日 於 長崎県壱岐市原ノ辻事務所

宮本一夫共同研究員の案内で九州大学考古学研究室によるカラカミ遺跡発掘調査現場、壱岐市教育委員会の田中聡一氏の案内で壱岐市内の関連遺跡等（車出遺跡・鬼の窟古墳・掛木古墳・壱岐郷土資料館）を見学。長崎県原の辻遺跡調査事務所にて共同研究員 4 名が楽浪郡関係および韓国と九州との交流について鉄をテーマに研究発表した。

鄭 仁盛 「楽浪土器・楽浪系土器と一支国」

高久 健二 「楽浪郡後期の墓制」, 武末純一「梯形鑄造鉄斧試論」

東 潮 「南北市糴と鉄の交易」

原の辻遺跡調査事務所にて楽浪系・韓国系の遺物を観察。その後、原の辻遺跡調査事務所長・安楽勉氏の案内で原の辻遺跡で現在調査中の船着場遺構や集落遺跡を見学した。

第 3 回研究会 10 月 31 日～11 月 7 日 韓国ソウル・京畿道・江原道の遺跡調査

10 月 31 日ソウル大学校博物館にて漢江流域の高句麗堡壘城出土の遺物の見学。同博物館の梁時恩氏と高句麗土器の編年問題などについて討論。11 月 1 日 京畿道加平大成里遺跡の見学。在地系土器の他、同遺跡で出土した楽浪系土器などの調査。江原道春川周辺の原三国時代の遺跡を見学。翰林大学校にて研究会を開催。共同研究員の東潮が発表した（「南北市糴と鉄の交易」）。2 日国立春川博物館、京畿道道全谷里遺跡の見学。臨津江流域の関連遺跡（瓠蘆古壘遺跡、六溪土城、鶴谷里積石塚など）の調査。高句麗と百済の領域戦争をしめす遺跡群。3 日峨嵋山城の高句麗堡壘城の発掘調査現場見学。午後、土地博物館の見学。とくに同博物館が実施した朝鮮の開城科学技術工業団地の発掘調査の成果などについて情報をえる。4 日韓国国立中央博物館などの見学。5 日～6 日韓国国立中央博物館における第 29 回韓国考古学全国大会に参加。

第 1 回研究会では、3 世紀を前後する時期の『三国志』魏書東夷伝の諸国（高句麗・夫餘・沃沮・挹婁・濊・韓・倭の諸国・諸民族）および魏を総合的な研究対象とし、近年のロシア沿海州、中国東北地方、朝鮮半島における考古学的調査をおこない、倭・倭人をとりまく国際環境を明らかにすることなどを協議した。このため今後 3 年間にわたり、毎年 10 月末から 11 月初めにかけて、当該地域の海外調査を実施し、その調査地域の勉強会を国内でおこなうこととした。また東夷伝とそれ

に記載された諸国に関して共同研究員2名がそれぞれ考古学と文献史学の観点から発表し、今後の調査に向けて問題提起をおこなった。

第2回研究会の長崎県壱岐の調査では、当該時期の遺跡、発掘調査現場の見学と朝鮮半島からの搬入遺物の調査をおこなった。このうち壱岐原の辻遺跡出土の搬入土器のなかに楽浪郡のみならず、中国東北地方からの搬入の可能性のあるものも含まれることが判明し、東夷伝に記された時代の広範囲な国際交流がうかがわれた。また共同研究員4名が研究発表をおこない、楽浪郡関連、弥生時代の鉄生産と鉄の流通問題について議論した。

第3回研究会では、韓国・漢江流域、臨津江流域各地の調査をおこなった。京畿道加平大成里遺跡をはじめ、現在発掘調査・整理中の遺跡や遺物の見学がかない、韓国原三国時代の遺跡からは在地系の土器に加えて、楽浪系の土器や遺物の出土していることを確認。また上記遺跡の時期に後続する三国時代の高句麗の南部地域への領域・勢力の拡大に関連し、漢江・臨津江流域に築かれた高句麗の山城や土城を踏査、峨嵋山の高句麗堡壘城の発掘現場も見学しえた。そのほか春川滞在中には、翰林大学校で本研究代表の東潮が研究発表をおこない、翰林大学校人文大学・李賢恵教授らと学術交流した。また11月5日、6日に「原三国時代文化の地域性」をテーマにして開催された韓国考古学大会は、時期的・地域的に本研究とふかいかかわるもので、韓国の原三国時代研究の最新状況を理解しえた。

平成18年度

第1回研究会 6月10・11日 於歴博

田中 俊明 「挹婁・東沃沮・濊－東夷伝の訳注－」

大貫 静夫 「古城址からみた遼西、遼東郡」

鄭 仁盛 「朝鮮遺跡の調査報告」

東 潮 「楽浪郡・帯方郡・遼東郡・玄菟郡の調査計画」

武末 純一 「靺鞨遺跡 A 地区の弥生系土器（予察）」

上野 祥史 「楽浪出土鏡の系譜」

石川 岳彦 「遼東郡の墓葬の地域性」

第2回研究会 10月24日～31日 於中国黒龍江・牡丹江・松花江・渾江流域の遺跡調査

10月24日遼寧省大連到着。営城子漢代墳墓。25日黒龍江省鳳林土城。26日中興土城、同仁遺跡。27日滾兔嶺土城、佳木斯博物館。28日吉林省東京城（上京龍泉府や関連博物館）。江東二十四塊石遺跡。29日帽兒山墓地遺跡、東団山遺跡、龍潭山城、遼寧省鉄嶺博物館。30日旧老城遺跡、遼寧省撫順施家墓群、遼寧省博物館。31日 遼寧省博物館、遼寧省文物考古研究所、研究所付属の資料室。

第1回研究会を6月に歴博で開催し、共同研究員7名が研究発表・報告をおこなった。本研究会では昨年度のフィールド調査地であった韓国側での最新の発掘調査成果をもとに、九州からの土器の流入事例の研究報告のほか、中国東北部に関する『三国志』魏書東夷伝の文献史学的研究の発表、遼寧省西部地域の漢代を中心とする時期の城址、遼寧省東部地域の墓制の地域性、東北アジア出土の漢魏晋の銅鏡などの分析をつうじて、当時の東夷地域内における各地域間の交流や地域性などが明らかにされた。いっぽうで現地の最近発掘調査の成果などを本研究に反映させ、フィールド調査

を通してさら研究を進めていくことなどを各研究員間で確認した。

第2回研究会は当初、フィールド調査を今年10月末に朝鮮民主主義人民共和国（以下朝鮮と略する）で楽浪郡郡治に比定される平壤地域を中心におこなう予定であった。しかしその後の国際情勢の変化により朝鮮への渡航・調査が不可能と判断された。

遼東半島大連周辺の営城子漢墓や樓上・崗上墓、哈爾浜から牡丹江流域の滾兔嶺土城や鳳林土城、黒龍江の同江（国境）から、同仁遺跡、金代の中興土城を踏査、周辺遺跡の出土遺物を佳木斯博物館で実見した。牡丹江上流の渤海上京龍泉府、松花江流域の吉林東団山遺跡、撫順の玄菟郡治推定地、施や高句麗墓群、新賓永陵鎮の第二玄菟郡治跡を踏査。鉄嶺博物館、遼寧省博物館で遺物の調査。遼東郡、玄菟郡、高句麗、夫餘、挹婁、沃沮の地域を踏査した。挹婁の種族と生業、現在の黒龍江の漁獵民の赫哲族との歴史的関係などと比較しえた。

本年度10月のフィールド調査では、中国東北地方の東夷諸民族に関連する遺跡の踏査、遺物の調査をおこない、当該時期の考古遺物からみた文化と東夷伝の記載（勢力圏や風習等）との比較研究の必要性を文献史学、考古学双方の観点から各共同研究員間で共有した。

また3月には本基幹研究が属する人間文化研究機構連携研究「ユーラシアと日本：交流と表象」の国際シンポジウム（於歴博）で、武末純一共同研究員が「倭人と韓人の移動」という題目で研究発表をおこない、他の連携研究班と意見交換した。

平成19年度

第1回研究会 10月23日～30日 於中国遼寧省・黒龍江省・吉林省・内蒙古自治区
10月23日遼寧省瀋陽到着。石台子遺跡。24日列車・乗用車で黒龍江省塔河県まで移動。25日黒龍江省漠河周辺を踏査。26日 内蒙古自治区鄂倫春博物館、嘎仙洞鮮卑遺跡。27日積雪の嘎仙洞鮮卑遺跡。28日内蒙古加格達奇から内蒙古海拉爾まで列車で移動。深夜、列車で海拉爾から瀋陽に向かう。29日瀋陽着。30日遼寧省博物館。

第2回研究会 1月26・27日 於歴博

東	潮	「高句麗をめぐる歴史環境」
後藤	直	「弥生時代の倭・韓交渉－倭製青銅器の韓への移出－」
川本	芳昭	「三国期段階における烏丸・鮮卑について－交流と変容の観点から見た－」
田中	俊明	「『魏志』濊伝・訳註稿 『魏志』韓伝・訳註稿」
大貫	静夫	「遼西郡・右北平郡・遼東郡城址」
武末	純一	「三韓と倭の交流」
宮本	一夫	「考古学から見た扶余と沃沮」
高久	健二	「楽浪・帯方郡塹室墓の系譜」
鄭	仁盛	「帯方太守張撫夷について」
仁藤	敦史	「東夷伝からみた倭国の王権と朝貢（仮）」
上野	祥史	「後漢、魏晉の北方疆域－并州・幽州－」
石川	岳彦	「遼東郡の墳墓の位置づけ」

第1回研究会は中国で開催した。当初、昨年度に調査を予定していた朝鮮のピョンヤン、大同江

流域の遺跡調査は国際的政治情勢により実施できなかった。

海外調査は黒龍江流域・大興安嶺一帯の遺跡を踏査した。烏居龍蔵の黒龍江（アムール）の民族学的調査，吉良，梅棹忠夫らの大興安嶺探検，大塚和義の民族学的調査。大興安嶺山中の嘎仙洞鮮卑碑石の発見，札賚諾爾・完工・六家子などの鮮卑遺跡の発掘などがおこなわれている。黒龍江から大興安嶺にかけてのフィールドは東夷諸国をみるうえで有意義であった。挹婁と大興安嶺・小興安嶺地域との関係，夫餘と鮮卑との境界・接触地帯，鮮卑の南遷問題，鮮卑と夫餘の境界，夫餘と挹婁との種族的ちがい，今日のオロチョン族やエヴェンキ族との比較研究をおこなった。内蒙古鄂倫春自治旗の鄂倫春博物館で鮮卑関連遺物や現代オロチョン族の民族資料などを見学した。また同自治旗の嘎仙洞洞窟壁面の北魏拓跋鮮卑の碑文を検討した。黒龍江流域から大興安嶺一帯の踏査はきわめて有意義であった。大興安嶺の南北にのびる地勢的条件は蒙古草原地帯の東の境界を形成している。『三国志』魏書東夷伝の諸地域は大興安嶺の東方に小興安嶺がよこたわり，黒龍江・松花江流域に「東夷」の歴史が形成された。渤海，遼，金の諸国の興亡地域のフィールドワークであった。

IV 研究の成果と課題

1977年に岡崎敬「東夷伝の世界と日本の登場」(『図説中国の歴史3 魏晉南北朝の世界』講談社)は，魏志東夷伝の考古学的研究の嚆矢である。そのご森浩一編『三世紀の考古学』上・中・下巻，学生社，1996～98年)が刊行された。東夷伝の諸国をふくめた地域研究である。

中国では，張博泉・魏存成1998『東北古代民族考古与疆域』が刊行され，中国東北地方の諸民族についての研究がまとめられた。また近年，夫餘・鮮卑についての研究の関心もたかまっている。

井上秀雄編1974・1976『東アジア民族史 正史東夷伝』1・2(平凡社)，山尾幸久1986『新版魏志倭人伝』(講談社)，佐伯有清2000『魏志倭人伝を読む』上下(吉川弘文館)，今鷹真・井波律子・小南一郎訳1977・1982・1989『三国志』(筑摩書房)の注釈書や翻訳書が刊行されている。

今回の共同研究は，「東夷伝」をキーワードとして，それぞれの専門領域をこえる契機となった。東北アジア史の研究である。倭人伝と東夷伝との関係について，東アジア的視点でとらえる。倭人伝を『三国志』東夷伝のなかで位置づけ，東夷伝の国際環境を明らかにすることを目的とした。現在と歴史上の諸国家・諸民族を峻別して，比較する視点が不可欠である。今回の共同研究によって，東夷伝諸種族の研究，東北アジア研究の一つの成果が生まれた。22年度の東アジアの国際交渉にかかわる特別展示プロジェクトも動きだした。今回の共同研究の成果は特別展示として生かしうるであろう。こんごさらに韓国朝鮮，中国，ロシアとの学術交流を促進し，新たなプロジェクトに期待したい。

東 潮(徳島大学総合科学部，国立歴史民俗博物館共同研究員)